

海産魚類に関する魚病診断

松坂 洋

1. 目的

海産魚類の異常並びにへい死発生時に、その原因を迅速かつ的確に診断し、魚病の適切な治療及び防疫対策を行う。

2. 材料及び方法

増養殖業者等からの異常魚やへい死魚の検査依頼による検体及び巡回指導時の検体について、ウイルス性疾病・細菌性疾病・真菌性疾病、寄生虫性疾病等について診断を行った。

診断はすべて外観症状、解剖所見及び顕微鏡観察による病原体の有無について検査した。

そして、ウイルス性疾病については、魚類株化細胞CHSE-214を用い常法による細胞変性の有無により診断、細菌性疾病は寒天培地（0.25%NaCl加普通寒天、0.25%NaCl加トリプトソーヤ寒天、0.25%NaCl加ブレインハートインフュージョン寒天及び海水サイトファーガ寒天）による細菌の分離並びに分離菌の抗血清による凝集反応によって判定した。

3. 結果

表1に魚種別疾病別の診断件数を示した。

魚病の診断件数は合計10件で、昨年度とほぼ同様の件数であった。

発生魚種は淡水のスッポンの魚病相談が1件あったが、海産魚類では主にヒラメ、マコガレイ、クロソイの増養殖魚種で、それに天然魚のクロソイ及びアイナメの魚病相談が2件あった。やはり種苗生産及び中間育成に関係したヒラメの魚病相談が5件と昨年度同様に最も多かった。

疾病別ではウイルス性疾病が昨年度と同様に確認されず、10件のうちビブリオ病、滑走細菌症とその合併症の細菌性疾病が4件、またスクーチカ症及び天然魚でよく見られる吸虫類のメタセルカリア（幼虫）の寄生による寄生虫性疾病の相談が合計4件と多かった。

昨年度及び今年度はウイルス性疾病が確認されなかったが、最近は原因不明の疾病や一度発生すると対策の難しいウイルス性疾病の発生が全国で確認されている。本県でもそのような魚病が発生しないよう、今後も病原体検査を含めた魚病検査並びに診断により魚病対策をしていくとともに、種苗生産機関及び中間育成機関では消毒等の魚病を発生させない防疫対策を日頃から進めていく必要がある。

表1. 魚種別疾病別診断結果

魚種 疾病名	海 面				内水面	合 計
	ヒラメ	クロソイ	マコガレイ	アイナメ	スッポン	
ビブリオ病		1				1
滑走細菌症	1		1			2
ビブリオ病+滑走細菌症	1					1
スクーチカ症	2					2
寄生虫症*		1		1		2
不 明	1					1
そ の 他					1	1
合 計	5	2	1	1		10

* 吸虫類のメタセルカリア（幼虫）の寄生